

では、多摩川の花火の日、一夜、朋子がテオを連れてどこかに避難する。

温かいうちに組まれた母の手に指輪がなくてどこにもなくて  
須藤歩実

母上への挽歌。棺の中の手だけをうたつて印象に残る。顔や髪をうたうのがふつうだからである。今は冷たくなつてしまった手を、「温かいうちに組まれた母の手」と表現し、日常的に見ていた筈の指輪が指にないことに、生前との違和を見いだしている。独自の視点、視線が印象に残る。

仰け反つた人形の首美しくリボンがほそく巻きついてゐる  
野原亜莉子

安易に耽美的な方向にゆかないように、用心しながら人形の歌を作りつづけているこの作者にしては、珍しく、耽美的な歌だなど思つて読んだ。美しく絞殺されたような、あるいは美をもとめて自死したような。谷崎潤一郎を思い出させる一首。

たくさんのこと諦めて少しだけほつとして入院の朝  
森屋めぐみ

だれも緊張する入院時の心境である。具体的なのは結句だけ、第四句まで抽象的な表現にとどめている点が特色。場面で伝えるより、空気で伝えようとしている。作者にとって大事件であるからこそ可能だった方法。

守備範囲広き外野手いるごとしキーボード打つとき  
倉石理恵  
の中指

意外な比喩の面白さ。自身の指の動きを、あたかもテ

レビ画面の外野の芝生をみるように、徹底的に客観視しているところが持ち味。最近、PCやケイタイ電話の歌が少なくなっている中で、目にとまった一首。

真つ青な空の真中で太陽はにこれる河を煌めかせをり  
増田満美子

一首中の「河」は、一読、ナイル河とか黄河とか、名だたる世界の大河の感じがする。そこが持ち味であろう。もちろんこの一首は、地図にあるじつさいの河ではなく、イメージの河、観念の河である。表現上、これは観念の世界だよと読者に示唆しているのは「河」だけである。こういう表現方法もある。

介護士の松田さんの掌は暖かでリハビリの棒熱くなつてゐる  
木島 泉

今月の一連は、デイサービスの歩行訓練。鉄棒で体を支えながら歩く練習らしい。指輪やネックレスなどおしやれをしてゆく歌があり、けつこう楽しんでるらしい。

鮮やかな夏夕焼をあやまたず等分割する鋼の格子  
十亀弘史

一切の装飾的なものを排除した、機能重視のメカニックスな建造物である刑務所にさす夏の夕焼け。「あやまたず」を核にして表現もメカニックスな点が見どころ。

三尺を掘れば鎌倉時代の土八百年ぶりの雨に濡れゐる  
白岩裕子

鎌倉では、今でもときどき合戦の名残の武具や人骨が出土する、という話を聞く。鎌倉在住の作者ならではの日常的な時間のすぐ向こう側の大昔。